

(1)評価基準に沿った評価	3人	2人	0人	1人	0人	4.2
(2)記述評価						
・ほぼ機器は完成域に達したと思われるので、今後は臨床応用、とくに乳幼児健診に用いて診断精度を上げていってもらいたい。 ・実地医療への反映を目指す方策への言及が欲しい。他の指標、例えばFeNOを加えた分析は可能か。 ・研究課題である「ぜん息のハイリスク群の鑑別」につながりうる研究結果が未だ不十分である。 ・喘息群と非喘息群でβ_2吸入前後のA_3/A_Tに有意差が見られても(要旨集図4)、この結果がβ_2吸入前後のA_3/A_Tの変化が喘息群と非喘息群の診断パラメータとなりうるかどうかは不明である。 ・肺音解析を乳幼児のぜん息ハイリスクのスクリーニングに応用。次年度(最終年度)の具体的なゴールを明確にして進めてほしい。 ・肺音の経年変化についての研究成果を期待する。 ・スクリーニングされたハイリスク群の予後や予防効果を検証しようとする、本調査研究の枠を超える課題ではあるが、長期的な視点での取り組みを希望する。						